

コミュニケーション

「教師の技術」と「学習してほしいこと」

はじめに

自分の思いを人に伝えたり、人の言っていることを理解したりすることができるようになると、世界はグッと広がり楽しくなります。

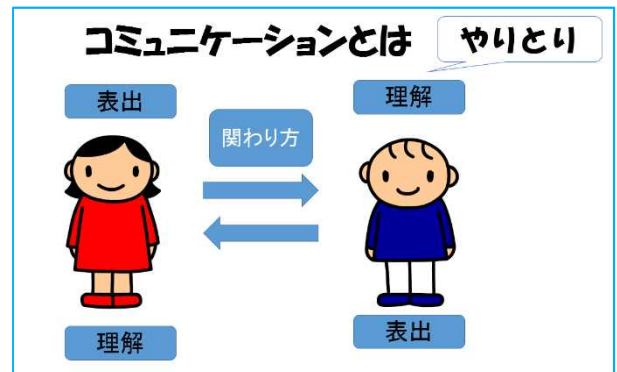
本校に通う児童生徒の中には、このコミュニケーションに難しさのある子がたくさんいます。先生方もどうやって指導すればいいか迷っているのではないのでしょうか。

で、本校には、コミュニケーションの指導をいろんな方法で実践している例がありましたのでまとめてみました。参考にしてみてください。

1. コミュニケーションとは やりとり

コミュニケーション (communication) とは「さまざまな情報内容」を「さまざまな手段」で「伝え合う」ことを総称する言葉です。つまり「意思・感情・思考などのさまざまな情報内容」を「言葉・身振りや手振り・表情・通信技術などのさまざまな手段」を用いて「互いにそれらを伝え合う」ような状況が、コミュニケーションと総称されるわけです。

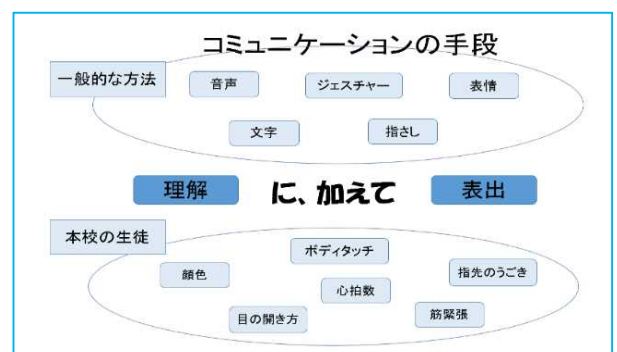
表出する人（発信）と理解する人（受信）は交互に役割を変えて自分の思いを伝えたり、相手の思いを理解したり「やりとり」します。



コミュニケーションの手段

コミュニケーションは、一般的には、話し言葉などの音声に加え、表情や仕草（ジェスチャー）など身体で表すものや、文字や絵カードなどで行われます。

本校に通う児童生徒たちは、これらの手段だけではうまく伝えることができないので、顔色や身体力の入れ方、心拍数なども使ってコミュニケーションをしようとしています。

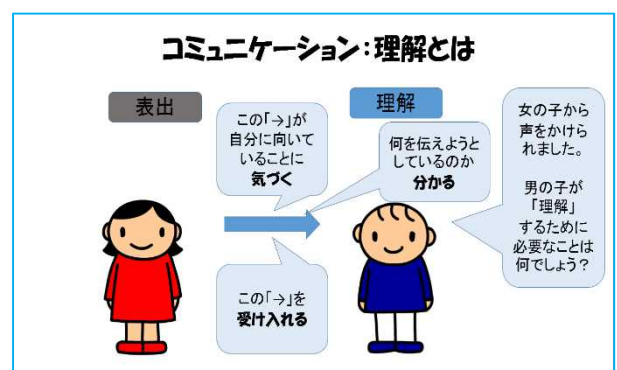


コミュニケーション:理解

コミュニケーションで相手が言うことを理解するには、まず、人が自分に何かを伝えようとしていることに気づき、それを受け入れないとできません。

自分の世界に浸たり、自分の外の世界にアンテナが向いていなかったり、アンテナの感度が低かったりするとなかなか気づくことができません。そこで、外の世界に向けたアンテナの精度を上げるために感覚学習などの指導が行われています。

また、人からの関わりかけが「心地よい」とか「まあ受け入れてもいいか」と思えるようになることも大切です。これは、指導の場での関わり方の良し悪しで決まります。教師としては、児童生徒が受け入れの準備を整えているかしっかり見極めてから関わりかけたところからです。



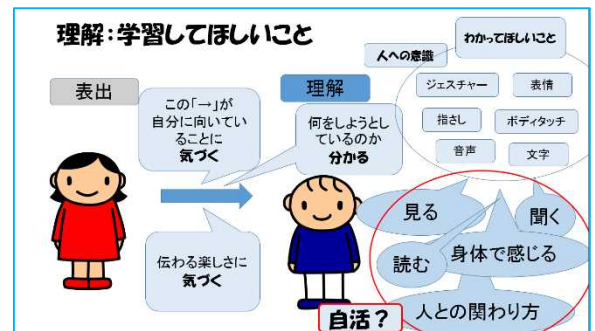
理解:学習してほしいこと

そうすると、学習してほしいことは、① 誰かの「→」が、自分に向いていることに気づくこと、② その矢印を受け入れること、③何を伝えようとしているのかがわかること、の大きく3つになります。

- ① では、主に身体で感じる感覚学習や身体のうちぎ、
- ② では、主に身体で感じることや小集団でのかかわりあい活動が中心的な活動内容になるでしょう。
- ③ については、幅が広く、いろいろな意味で見たり聞いたり、人との関わり方も含めた指導内容になるでしょう。

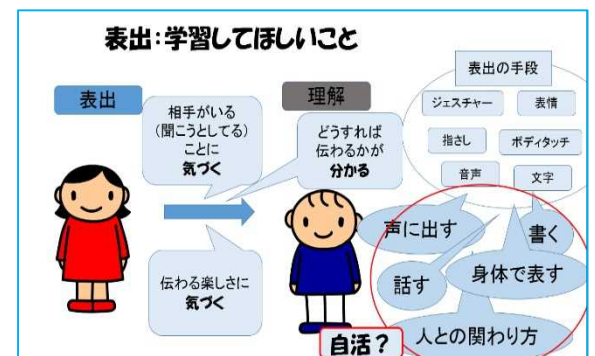
※日常会話ができる（AACも含めて）ような児童生徒は、もっと具体的なことを学習する必要があります。

例えば、「困ったときをお願いする」、「事務室へのお使い」、「校外学習での買い物」など日常の生活を念頭に置いたものがその例です。他にもたくさんあると思います。生活の具体的な場面を想定して「やりとりの仕方」を繰り返し練習しましょう。



表出:学習してほしいこと

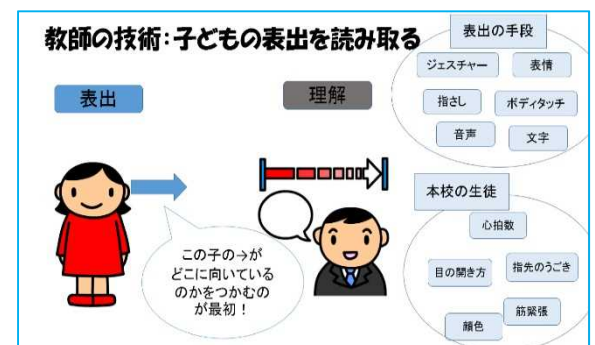
表出も、学習してほしいことは、① 聞こうとしてくれる人がいることに気づくこと、② 伝えることの楽しさに気づくこと、③ どうすれば伝わるのか手段がわかること、の大きく3つになります。



教師の技術:子どもの表出を読み取る

児童生徒がせっかく発信していても私たち教師が気づかなければ元も子もありません。

一般的な発信の手段だけでは気づけない発信もあります。それが、心拍数・顔色・目や指先のわずかなうごきなどです。どこに、その子の「表出」が現れるかわかりません。広くアンテナを張っておきましょう。



意識の「→」

表出を読み取る際に一番大切なことは、その子の意識の「→」がどこを向いているのかを把握することです。矢印には、太さと方向があります。どれくらいの太さで、どこを向いているか、つかんだうえで声をかけましょう。

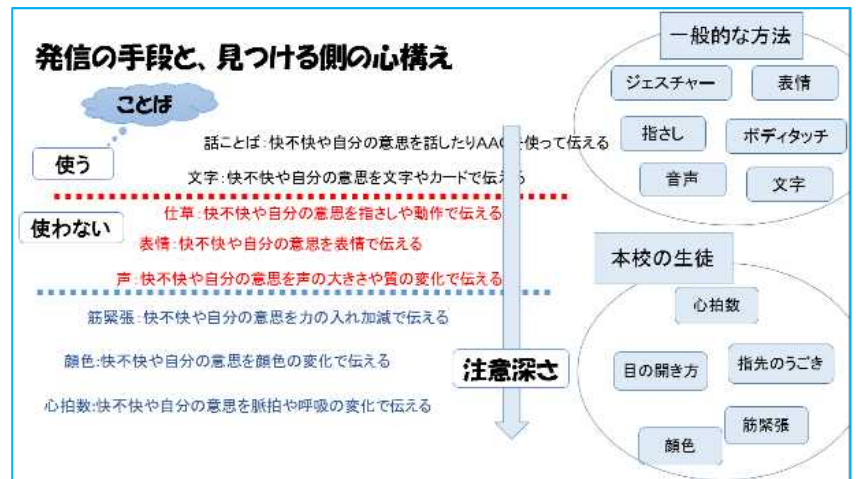
※→が太い時、その子の意識は強くそこに向いています。そのようなときには声をかけられても「じゃまくさッ」と感じるだけです。→が自分のほうを向くのを待ってから声をかけましょう。



発信の手段と、見つける側の心構え

発信の手段はいろいろあります。大きく2つに分かれます。

- ① 話し言葉や文字を使う
- ② 話し言葉や文字を使わないの2つです。
- ②はさらに2つに分かれ、
- ㉠ 自分の外に出る表出
- ㉡ 自分の外にでにくい表出の2つです。



これらの発信を見つけるには、「話しことば」から「心拍数」に向かうほど「注意深さ」が必要になります。

コミュニケーション指導のステージ

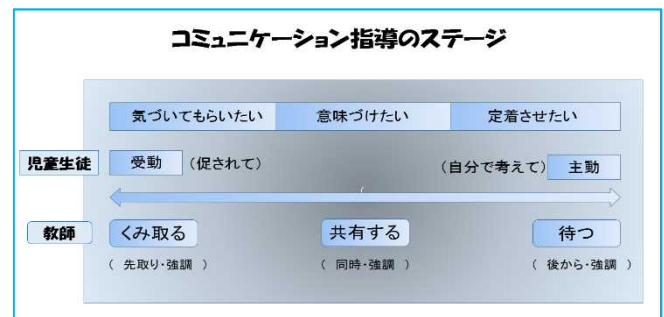
コミュニケーションの指導の際は、今どのステージの指導をしているのかを明確にしておく必要があります。それは、全部関わり方が違うからです。

「気づいてもらいたい」ステージでは、児童生徒は受動的で、ですから教師は、ちょっとした発信もくみ取って（先取り）強調してフィードバックしないとけません。

「意味づけたい」ステージでは、児童生徒と教師は共有しあう関係で、児童生徒が感じたり考えたりしたと同時に「意味」をフィードバックしないとけません。

「定着させたい」ステージでは、児童生徒が自分で考えて自分からコミュニケーションをとれるようになるため、教師は、児童生徒の発信を待って、後からフィードバックをしないとけません。

このように目的がステージごとに違うので、声掛けで使う言葉やタイミングは当然ですが違ってきます。



2. 指導事例

指導事例1: 理解・表出

「気づいてもらいたい」

小学部「たてわりがくしゅう：ゆったりグループ」の例です。

暗室で光るペープサートを使って、感じたことを発信したり、誰かが気づいてくれることに気づいたりすることをめあてにした指導です。

いろんな感覚を活用して、自分の「外」への気づきを促します。「人」への気づきは、「小さな発信」をくみ取りフィードバックすることで促します。

一対一の整理された学習環境が必要です。



指導事例2:表出

「気づいてもらいたい～意味づけ」

小学部「からだのうごき 感覚運動」の例です。

トランポリンが大好きなので、何度も揺らしたり止めたりして、「もう一回！」の表出を促しています。

「好きなこと」と何度も繰り返せることを活かして楽しみながら表出を促せます。



指導事例3:理解

「気づいてもらいたい」

小学部「からだのうごき リラクゼーション」の例です。

膝裏からふくらはぎのリラクゼーションをはかりながら、「自分の身体」への気づきと、自分の身体に触れている「手」や「人」への気づきも促しています。

「ここよ、わかる?」「あ、今力抜けたね」「きもちいいね」「いたたたた」などの声掛けが重要になります。自分の内向きに「→」が向いている子に有効です。



指導事例4:表出・理解

「定着させたい」

中学部「自立活動 コミュニケーション」の例です。

表情（笑顔）を使って「YES/NO」を伝えるコミュニケーション方法の定着をめざして指導をしています。

教師は、「YES/NO」で答えられるような質問を用意します。本人には考える時間を十分与えてから問いかけます。

ちなみに、この時の質問は「昨日の晩御飯はなあに？」で、答えは「鍋」だったそうでした。



指導事例5:表出・理解

「意味づけたい～定着させたい」

小学部「たてわりがくしゅう：表情・発声グループ」の例です。

活動の随所に自分で「えらぶ」ことを盛り込み、「求められていること」を理解し、「自分の意思をつたえる」方法を身につけることをめあてにした指導例です。

「えらぶ」ために「みる」「手を伸ばす」を使う子もいれば、「表情」や「声」を使う子もいます。それぞれに自分なりの表出方法を学習しています。

指導事例6:表出・理解

「意味づけたい～定着させたい」

小学部「コミュニケーション指導」の例です。

文字盤を使って自分の考えを伝える練習をしています。このような「ローテク」も、実用性の高い道具です。50音（ひらがな）を覚えながら、コミュニケーションの道具として文字盤を使う練習もいいですよ。

なお、文字盤はいつも机の端に張り付けておいてすぐに使えるように工夫されてしていました。

指導事例7:表出・理解・人とのかかわり

「意味づけたい～定着させたい」

小学部「朝の会 司会」の例です。

話し言葉が出ない児童に、AACを使って司会をしてもらっています。参加の質を高める（役割）ためにも大切です。

AACだけでなく、ジェスチャーや声も同時に使うようにすることで、意味理解をしやすいように工夫しています。

ただ、AACを使うと活動に参加できているように見えるのに、本人の理解は深まっていないことがあります。注意しましょう。

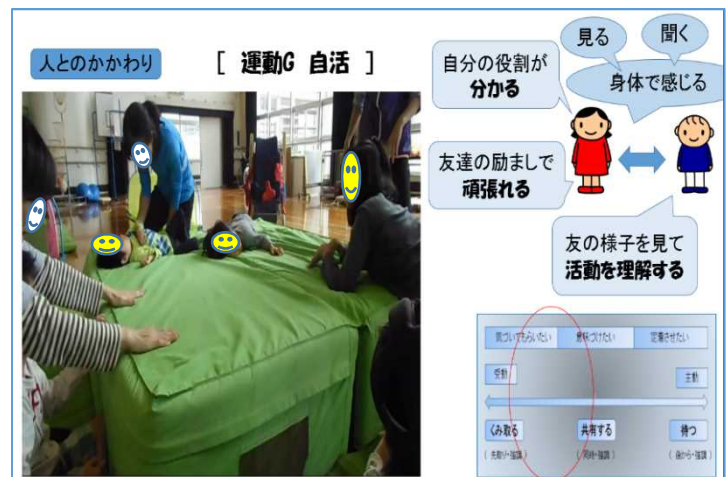
指導事例8:人とのかかわり

「気づいてもらいたい～意味づけたい」

小学部「たてわりがくしゅう：運動グループ」の例です。

「人とのかかわり」方の学習をしています。「友達の活動の様子を見れば自分のすべきことがわかる」ことや「自分はどこにいて、何をすればいいか」、「友達の頑張りを励ます」ことや「励まして頑張る」ことなどを身につけることをめあてにした指導事例です。

活動や場の理解が混とんとしていて自分の行動をコントロールすることが難しい子に有効です。自分の居場所や役割が明確で、友達の活動の姿を見とりやすい場の設定が重要になります。



指導事例9:人とのかかわり

「気づいてもらいたい」

学部「たてわりがくしゅう：かかわりあいグループ」の例です。

小集団で、友達へ向ける「→」を育てたり、自分に向けられた「→」を受け入れたりできるようになることをめあてにした指導事例です。

本校の児童生徒は、個別指導になりがちで小集団で活動を共にすることが少ない傾向があります。小集団で友達同士の関わりあい活動で学べることはたくさんあります。仕組んでいきたい指導内容です。



指導事例 10:人とのかかわり

「定着させたい」

小学部「たてわりがくしゅう：やりとりグループ」の例です。

友達同士の関わりを前面に押し出し、友達の考えや気持ちを、様子を見たり、発言を聞いたりすることで理解し、どう対応すべきか考え、行動できることをめあてとした指導事例です。

教師は、できるだけ見守り、「〇〇くん、××さんに何かしてあげることがあるんじゃない？」など示唆的なことばかけを心がけるようにしています。大切に育てたい力の一つだと思います。



指導事例11:日常生活につなぐ・広げる

「定着させたい」

高等部 校外学習の事前学習の例です。

電話でのコミュニケーションの勉強です。校内のインターホンを使って、事務の先生や教頭先生などに電話で用件を伝える練習をした後に、お店の人に予約の電話を入れています。

日常生活で使うコミュニケーションは、具体的な使用場面を想定すると、何を学習すればいいか、また、その練習方法はどうすればいいのかなどは思いつきやすくなります。例えば、お金を支払うときに必要なことは？とか、例えば、お店の店員さんに注文するときは？などです。

時間はかかるかもしれませんが、児童生徒が実生活で使える技術を身につけることができることをめざすのもコミュニケーションの学習では大切です。

日常生活経験の範囲が狭い本校の児童生徒にとって、実生活で使える技術を学ぶことは、計画的にねらって指導しないと難しいので、ぜひ、意図的に様々な機会を用意して学習できるようにしていきましょう！



3. 教師の技術

日常的にすぐに使える技法 - 言語心理学的技法-

児童生徒と接するとき、リアクションに困ることが多いと思います。そんな時に使えるリアクションの方法が「インリアル・アプローチ」でまとめてありましたので紹介します。

特に上4つが、よく使える方法です。

「この子は何を考えているのだろうか？」とわからない時は、上から2つ。とりあえず真似る。ミラニングとモニタリングです。真似ることで、子どもはリアクションが返ってくることに気づきます。さらに、真似ていると、

子どもの考えがなんとなく感じ取れるようになってきます。それを、本当かどうか（真実を明らかにすることは難しい）わからなくても、感じたまま言語化するのが次のパラレルトークです。推測で構いません。代わりにことばにしてあげてください。意外と楽しいし、子どもの考えに近づけますよ。

合わせて、自分の感じ考えたことをそのまま言葉にして言う（セルフ・トーク）も大切です。子どもは、大人のことばを聞いて学びます。

どうリアクションしたらいいか、迷った時使ってみてください。

なお、下の3つは、使い方を間違えるとコミュニケーション意欲を減退させてしまいます。とても注意が必要な方法です。コミュニケーションに楽しさを感じ始めたばかりの児童生徒にはあまりお勧めできません。

すぐに使える技法 - 言語心理学的技法 - (「インリアル・アプローチ」P15より)

子どもの行動をそのまま真似る	;	ミラニング
子どもの音声やことばをそのまま真似る	;	モニタリング
子どもの行動や気持ちを言語化する	;	パラレル・トーク
大人自身の行動や気持ちを言語化する	;	セルフ・トーク
子どもの言い誤り正しく言い直して聞かせる	;	リフレクティング
子どものことばを意味的、文法的に広げて返す	;	エキスパンション
子どもに新しいことばのモデルを示す	;	モデリング

大人の基本姿勢

これも「インリアル・アプローチ」から抜粋したものです。SOULというコミュニケーションにおける大人の基本姿勢です。それを、本校の児童生徒に合わせて解釈すると以下ようになります。

SOULのSは、子どもの受け入れ準備ができているかどうかをつかみましょう、のSです。

SOULのOは、子どもの表出を理解するためには、まず「→」がどこにどれくら

いの太さで向いているのかを把握する、のOです。様々な能力と「→」を観察からつかむようにしましょう。

SOULのUは、コミュニケーションがとれるようになるにはどうしたらいいか、援助の方法はないか考える、のUです。ここはじっくり何度も「ためす」ことを繰り返しながら見つけることになります。

SOULのLは、一般的な手段以外にも本校の児童生徒にある特別な表出方法があるので、そこに目を向けましょう、のLです。

基本姿勢として大切にしていきましょう。

大人の基本姿勢 - SOUL (ソウル) - (「インリアル・アプローチ」P13より)

Silence (静かに見守ること)	子どもが場面に慣れ、自分から行動が始められるまで静かに見守る。
Observation (よく観察すること)	何を考え、何をしているのかよく観察する。 コミュニケーション能力・情緒・社会性・認知・運動などについて能力や状態を観察する。
Understanding (深く理解すること)	観察し、感じたことから、子どものコミュニケーションの問題について理解し、何が援助できるかを考える。
Listening (耳を傾けること)	子どものことばやそれ以外のサインに十分耳を傾ける

※「インリアル・アプローチ」というコミュニケーション指導の考え方は、とても参考になりますよ。

参考文献

- ・「インリアル・アプローチ」:日本文化科学社 竹田契一・里見恵子 著
- ・「肢体不自由養護学校指導活用マニュアル はてな?解決ハンドブック」:福岡市発達教育委員会
- ・「障害の重い子どものコミュニケーション評価と目的設定」:ジアース社 坂口しおり 著